公益社団法人国際演劇協会（ITI/ユネスコ）日本センターは、ユネスコ傘下の国際組織である国際演劇協会ITI（International Theatre Institute）加盟の公認団体です。ITIは世界平和と相互理解の促進を希求するユネスコ憲章の精神に基き、演劇による国際交流の増進を目的として1948年に創設され、現在約90の国と地域が加盟しています。

公益社団法人 国際演劇協会（ITI/ ユネスコ）日本センター
Japanese Centre of International Theatre Institute / UNESCO

I.T.I.

I.T.I.NEWS 2021.1.31. No.132

2021年 新しい年のスタートにあたって

コロナ疫下、国際間の情報交流強めたい

公益社団法人　国際演劇協会日本センター（ITI/UNESCO）
会長　永井　多恵子

２０２１年、また新しい年を迎えました。

昨年来、自然界から人類への脅威――コロナ感染禍にさらされ、いくつもの舞台が中止に追い込まれました。今年もまた、しばらくは劇場入口での検温、手指の消毒、換気、舞台との距離などを気遣いながらの仕事が続きそうです。劇場が閉鎖され、職を失った人も多く、夏以降再開された劇場でも思うように客足が伸びず、逼塞感が漂う日々が続きました。

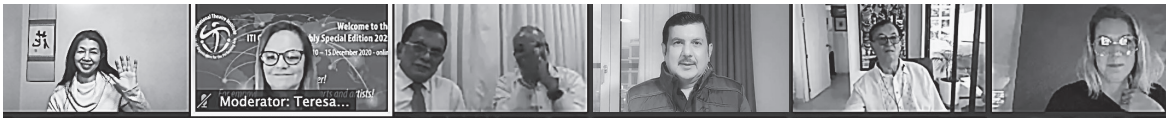
それでも、私たち舞台芸術に勤しむ者たちは少しでもよい舞台を観客に届けようと立ち上がり、知恵をしぼり、果敢に闘ってきたといえるでしょう。

舞台芸術というものは観客とともに創り上げてゆくものと知りつつ、それでもなお、リモートでの配信に活路を見出す試みも多く行われました。その好例「図夢歌舞伎」松本幸四郎丈の気概を見ました。

また、舞台芸術関係者が一体となって社会に働きかけを行ったことも歴史に残ることです。「緊急舞台芸術ネットワーク」や、「WeNeedCulture（これで一語）」が立ち上がり、官僚や政治家たちに働きかけを行いました。

これまで、我が国の文化に対する国の支援の少なさを嘆くことはあっても、また、個別的に動くことはあっても、一斉に立ち上がったのはおそらく、初めてのことではないでしょうか。災禍の中、世界各国で在住して働く日本のアーティストたちから、各国政府の支援状況をリモートで発信できたのも、ＩＴＩの仕事としてよい実績だったと思います。

文化に対する国の認識も欧米、近年では中国、韓国に比べても懸隔があります。舞台芸術の国際情報交流で役割を果たすＩＴＩ日本センターとして、デジタル時代の技術も活用しつつ、今後も諸外国との交流を強め、また、日本センター会員同士の情報交流も強めていきたいと思います。



コロナ禍に世界で

「ITIオンライン世界大会特別版」開催、ライブ配信

2020年12月10日から15日まで、国際演劇協会本部による『ITIオンライン世界大会特別版』が、ZoomとFacebookを用いて、全世界の視聴者に公開する形で開催され、日本センターからは理事として三輪えり花が参加した。概略をお伝えする。

■開催主旨

新型コロナウィルス（以下、コロナと略す）による世界的感染拡大により、大きく活動を阻害され、世界の芸術活動が危機に瀕していることを危惧したITI本部は、『オンライン世界大会特別版』という大胆で新しい試みを行うこととなった。

当大会には合言葉がある。

We, act together! For empowering performing arts and artists!

We, act together! For empowering performing arts and artists!

一緒に行動しよう！ 実演芸術（パフォーミング・アーツ）と実演芸術家を鼓舞するために！

（一緒に行動しよう！ 実演芸術と実演芸術家を鼓舞するために！）

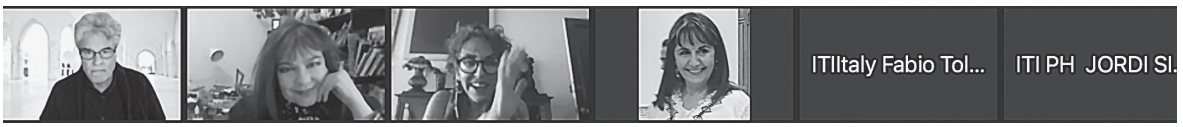
世界中で瀕死の状態にある実演芸術とそれに携わる人々を、ジャンルと国境と言葉を超えて勇気づけ、これからの未来に繋げていくことが当大会の開催主旨である。

■各団体参加形態

当大会は、Zoomを介して世界中のITIセンターおよびITI関連コミッティーやフォーラムの代表をオンライン上に集め、それぞれの活動をコロナの前、最中、そして未来の展望の3テーマを軸にして作成したアーティスティックな3分間の動画を発表する形式で行われる。その模様が全世界の視聴者にFacebookライブ配信を通じて無料で同時中継された。日本センターもまた、『【紛争地域から生まれた演劇】および【国際演劇年鑑】の紹介を軸に動画を作成し発表した。

■実際の開催の模様と印象および考察

開催初日は、副事務局長チェン・ゾンウェンによる開会宣言、事務局長トビアス・ビアンコーネによる挨拶、ユネスコ

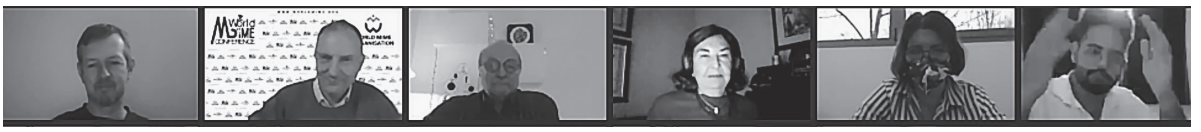


文化部副事務局長アーネスト・オットーネとＩＴＩ会長モハメド・サイフ・アルアフカム（前ページ写真上段右から３人目）によるライブでの歓迎メッセージ等で幕を開けた。主旨はいずれも、「演劇の力は人類社会の希望である。すべてのパフォーミング・アーツの未来を、このパンデミックを乗り越えて、作っていこう」というものであった。

２日目から５日目にかけての各国発表は、まさに圧巻であった。日本時間夜10時から日を跨いで午前２時まで次々と発表が進む。毎日、司会者が代わり、各団体の発表が終わると一言の温かいコメントを送る。

日本センターは４日目、12月13日の５団体目であった。私は前述の動画を携え、この一年の様子や今後の展望については、コロナがもたらした新しい世界で演劇を新しく生まれ変わらせるための活動を続けていく旨、英語で述べた。多くの参加団体から、Zoom チャットで温かい応援の言葉をいただいた。

コロナで人を集められない中、どの発表からも、なんとかアーティスティックな動画を作ろうと試行錯誤した様子が見て取れる。誰もが、コロナ前を紹介する部分では、知らぬ国の舞台の表現方法に舌を巻き、コロナ最中のアーティストの苦悩に共感の涙をこぼし、そしてコロナ後の展望の部分では、強く温かいエネルギーに胸を躍らせたはずである。必要は発明の母とはよく言ったもので、この制限下、見事な芸術作品といえる動画の数々が画面を飾り、アーティストたちの創造性と想像力が躍動した豊かな時間が世界中に発信された。



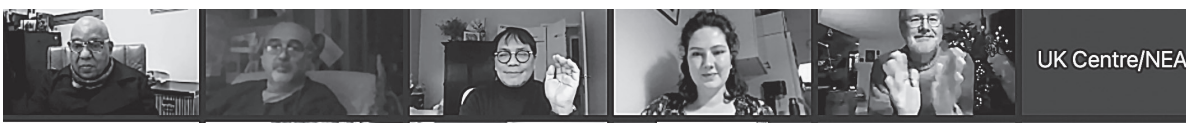
演劇の力は人類社会の希望だ。すべてのパフォーミング・アーツの未来を、このパンデミックを乗り越えて作っていこう。

——「ＩＴＩオンライン世界大会特別版」開幕メッセージから

発表数は、総計66センター、関係団体36が集い、国際演劇協会のネットワークと規模の大きさを実感する。感染症対策のため、口を開くことと身体的接触を封じられ、未来を計画することもできない中、もしかしたらリアルには出会うことも言葉を交わすこともなかったであろう人々とオンライン上で出会い、共感し、応援し、連絡先を交換し、仲間となる。

全世界のアーティストが通ったこの経験は、今後の生の舞台芸術活動に大きな、そしてよい影響を与えていくだろうと感じさせる。日本センターの国際的な発信力をより強化し、貢献に努めていきたいとの思いを新たにした、密度の濃い６日間であった。

（報告＝理事・三輪えり花）



文化庁「文化芸術活動の継続支援事業」

海外戯曲上演のためのオンライン著作権講座

昨年10月、「海外戯曲上演のためのオンライン著作権講座」と銘打って3本のオンライン講座が開催されました。戯曲翻訳部会の企画アイデアをＩＴＩが実行したもので、制作、観客動員、司会進行などで同部会が協力しました。

第1回は「海外戯曲作品との付き合い方入門～著作権全般の基礎知識～」と題し、骨董通り法律事務所、福井健策さんを講師にお招きし、海外戯曲上演に際して必要な著作権の基礎知識を伺いました。

第2回は「翻訳戯曲上演のために1～英語圏の演劇作品と著作権について～」と題し、シアターライツのマーチン・ネイラーさんと吉田和宏さんに登壇いただき、英語圏の戯曲を上演する際の手続きについての概説と、日本の海外戯曲上演の黎明期から貢献し続けていらっしゃるネイラーさんの半生と活動についてお聞きしました。

第3回は「翻訳戯曲上演のために2～フランス語圏の著作権について～」と題し、フランス著作権事務所のコリーヌ・カンタンさんと小澤美奈さんをお迎えし、フランス語圏の戯曲を上演する際の手続きや過去の事例について話していただきました。

全3回ライブ配信、アーカイブ配信合わせて70人が視聴

この事業は、文化庁の「文化芸術活動の継続支援事業」の補助を受けて開催されました。ＩＴＩ初のオンライン事業は、ライブ配信とアーカイブ配信を合わせて70名ほどが視聴しました。今後はこの経験を活かし、戯曲翻訳部会が母体となって、こうした講座を継続開催していきたいと考えています。

（報告＝戯曲翻訳部会・青柳敦子）

骨董通り法律事務所の福井健策さん

シアターライツのマーチン・ネイラーさんと吉田和宏さん

フランス著作権事務所のコリーヌ・カンタンさんと小澤美奈さん

ＩＴＩ戯曲翻訳部会総会報告

部会長伊藤洋氏、副部会長吉岩正晴氏

戯曲翻訳部会昨年は、6月に第1回総会を開催し会則を制定しました。役員人事も決定し、部会長に伊藤洋氏、副部会長に吉岩正晴氏、運営委員に青柳敦子、石川麻衣、一谷真由美の三氏、監査に中山夏織氏が選任されました。10月にはセゾン文化財団の助成金に申請しましたが不採択。また、ＩＴＩ初の配信事業「海外戯曲上演のためのオンライン著作権講座」に協力し、全3回の講座の司会を中山夏織、後藤絢子、松田和彦の3氏、制作を青柳敦子が担当しました

（報告＝戯曲翻訳部会・青柳敦子）

ＩＴＩ英連邦部会活動報告

オンライン・シアターで配信

Ｏ・ヘンリー『賢者の贈り物』

ＩＴＩ英連邦部会は昨年1月25日に「ハロルド・ピンター戯曲 勉強会&懇親会」を新宿・無何有（むかう）で開催、3月にもその第2回を予定していましたが、コロナ禍のために中止となりました。

その後は月1回オンライン・ミーティングを行い、新訳戯曲の読み合わせ等を続けましたが、12月18日に無料のオンライン・シアター『賢者の贈り物』（作＝Ｏ・ヘンリー、訳・脚色＝石井あつこ、演出＝三輪えり花／出演＝山下裕子、品川恵子、後藤祥子、本野斗志輝）をライブ配信しました。

（報告＝副会長・吉岩正晴）

海外で活動するプロフェッショナルシリーズ〈特別編〉

竹中香子（フランス）

原サチコ（ドイツ）

菅江一路（ドイツ）

近藤瑞季（ベルギー）

外間結香（フランス）

神沢希洋（米国）

オンライントーク コロナ禍のアーティスト

国際演劇協会（ＩＴＩ）日本センターでは、例年、海外で演劇・ダンス等の活動をしているプロフェッショナルの方たちをお招きするトークシリーズを開催しています。

今回はその特別編として２０２０年10月25日に「コロナ禍のアーティスト座談会」を開催し（Zoomのウェビナーを利用）、萩原健さん（明治大学）の司会で、竹中香子（フランス）、原サチコ（ドイツ）、菅江一路（ドイツ）、近藤瑞季（ベルギー）、外間結香（フランス）、神沢希洋（米国）の６名の方々からお話を伺いました（カッコ内はそれぞれの活動拠点）。

フリーランスの活動基盤

コロナ禍による大きな危機に見舞われたときに、自身と周囲のアーティストたちがどのような状況に遭遇したのか。国単位の移動ができなくなり、カンパニーのメンバーが離脱したり、舞台公演の中止や延期によって出演の機会が失われたりするなど通常起こり得ない事態に直面したときの様子がそれぞれリアルに語られました。

基本的なこととして、ヨーロッパでは、平常であれば公立の劇場やフェスティバルなどが存在していることでフリーランス・アーティストが活動できる基盤があることや（日米との違い）、演劇と教育との間に強いつながりがあること、プロのアーティストには休業補償がなされる点などの大きな違いがあることが理解できました。アメリカではコロナ感染爆発状況下での演劇の困難さについてとともに、劇場のBLM（ブラック・ライブズ・マター）への連携の動きについて報告がありました。２０２０年11月25日まで期間限定配信を実施。

（報告＝事務局長・曽田修司）

『国際演劇年鑑』執筆陣によるレクチャー

ワールド・シアター・レポート

ITI日本センターでは1972年から、1年間の国内外の舞台芸術状況をまとめた『国際演劇年鑑』（日英版）を企画・編集・刊行しています（文化庁委託事業）。限りある誌面に収まりきらなかった話をもっと語っていただこうと、『国際演劇年鑑』の執筆者によるレクチャー「ワールド・シアター・レポート」を2017年から開催。

山ノ内春彦さん

鶴留聡子さん

今年はインドとイタリアを紹介。コロナの影響で初のオンライン開催となりましたが、そのおかげでインド・ケーララ在住の鶴留聡子さんとイタリア・ローマ在住の山ノ内春彦さんを講師に迎えることができ、開催後はアーカイブ配信も行いました。

インド・ケーララ州とイタリア・ローマからアーカイブ配信

2013年から断続的にインド演劇をレポートしている鶴留聡子さんは、「インド社会と舞台芸術」と題して、ご自身活動の経緯、そしてインド演劇を考察する上で、これほどの規模と多様性の何をもって「インドらしさ」というのかとの問いに向き合いつつ、最後に、ご自身が拠点としているケーララ州アタバディの山間部にある劇場の展望について語られました。

2013年から断続的にイタリア演劇をレポートしている山ノ内春彦さんには「コロナ禍のローマで再考する演劇の役割」と題して、3か月のロックダウンを経験されたコロナ禍での日々の暮らしの中で、ご自身が触れたアーティストの活動、またピーター・ブルック、ユージェニオ・バルバ、イェジー・グロトフスキ、ピエル・パオロ・パゾリーニに言及しながら、劇場が閉鎖されている現在において、演劇の役割とは何かについてお話しいただきました。

（報告＝事務局・壱岐照美）

「世界の演劇舞踊ネットワークを元気にする」

クラウドファンディングにご厚志

ITI日本センターは令和2年11月2日から令和3年1月8日まで、クラウドファンディング「世界の演劇舞踊ネットワークを元気にする」を実施しました。期間中、21人の方々から総額24万円のご支援をいただきました。ご厚志に心から感謝申し上げます。

ご支援をいただいた皆様

小田切ようこ
糟谷治男
川合貴之
Kawano Momoko
曽田修司
高野しのぶ
永井多恵子
中村ひろみ
Hanayo Murai
松本功
Yasuda Masanori
横山義志
吉岩正晴
吉植荘一郎
匿名　7名

（敬称略・五十音順）

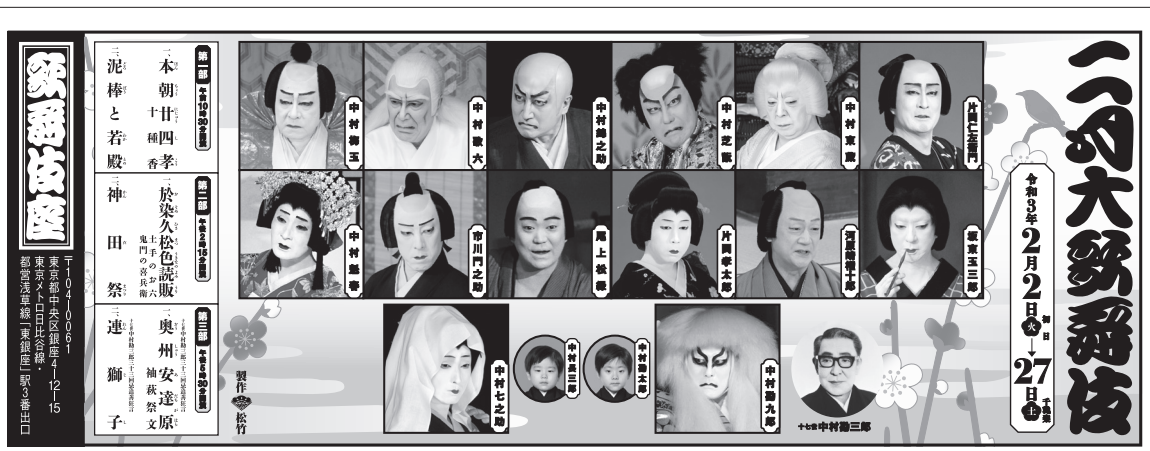
ITI日本センター理事から寄付

ITI日本センターは昨年の新型コロナウイルス感染拡大により、予定していた事業を中止せざるを得ない状況となりました。このような状況に直面し、理事各位にご寄付のお願い（任意）を致しましたところ、次の方々から総額92万円のご厚志を賜りました。心より御礼申し上げます。

（事務局）

安宅りさ子　安孫子正
大笹吉雄　木田幸紀
曽田修司　永井多恵子
菱沼彬晁　三輪えり花
吉岩正晴　和崎信哉

（敬称略・五十音順）



「緊急事態舞台芸術ネットワーク」に業界２２３団体

コロナ禍に苦しむ演劇業界を代表して、支援策やガイドライン策定の政府側との協議の窓口となり、公演の再開をめざすことを最初の主な目的として、演劇公演主催・制作・スタッフ団体や劇場、業界団体が広く集まって、昨年5月14日発足した「緊急事態舞台芸術ネットワーク」は、12月21日時点で、参加223団体の組織になっています。国際演劇協会日本センターも賛同団体として参加しており、私はネットワークにおいて、政府との交渉チームで活動しています。

文化庁、経産省と支援策協議　政府との協議の結果、7月1日にネットワークとしての「舞台芸術公演における新型コロナウイルス感染予防対策ガイドライン」を公表し、その後改定をするとともに、周知活動を行っています。文化芸術への支援策に関して、文化庁とは、「継続支援事業」「収益力強化事業」など、経産省とは、「コンテンツグローバル需要創出促進事業費補助金」（いわゆるJ-LODlive補助金）、「GOTOイベント」などに関して、予算獲得要望、制度設計を、関係国会議員とともに行い、ネットワークの中心となっている野田秀樹さん、福井健策弁護士をはじめとする業界多士の献身的な活動により、多大な成果を上げることができました。もちろん要望が通らず、利用当事者の不便が残る部分もありますが、支援制度全般をより良いもの、より大きいものになるよう努力をしています。

加盟団体に「助っ人センター」開設　これら政府の動きに、東京都と情報交換、全国から来る情報を合わせて加盟団体に情報を提供、支援制度の利用サポートのため、説明会・勉強会を実施し、「助っ人センター」も開設するといった活動を行っています。事態が緊急でなくなる日が来ることを願っています。

（報告＝理事、東宝株式会社・松田和彦）

J-LODlive　音楽・演劇・ダンス・芸能等の日本発の、国内で実施されるライブ公演で、収録動画の一部がYouTubeなどで海外向けに配信されるもの（無観客中継、限定観客開催、一般開催、入場料無料開催を含む）

会員消息

（令和２年２月～令和３年３月１日）
事務局調べ・順不同・敬称略

【個人会員入会】
奥田知叡（座・高円寺劇場創造アカデミー11期）
岸正人（公益社団法人全国公立文化施設協会）
渡辺弘（公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団）

【個人会員退会】
笹本公江
三林京子
八巻寿文
鰐淵恵美

【団体会員より個人会員への変更】
安田雅弘（団体会員劇団山の手事情社から変更）

【ご逝去】
お悔やみ申し上げます
坂口芳貞（令和２年２月13日）
坂田藤十郎（令和２年11月12日）
宮城まり子（令和２年３月21日）
山崎靖明（令和元年10月７日）※事務局届令和２年４月15日

【叙勲・功労者・受賞】
おめでとうございます
▽令和元年度 日本芸術院賞　松本幸四郎
▽第74回文化庁芸術祭賞演劇部門優秀賞　名取事務所／文学座／宝塚歌劇団
▽同賞テレビドラマ部門大賞／優秀賞　日本放送協会
▽同賞テレビドキュメンタリー部門優秀賞　日本放送協会
▽同賞ラジオ部門優秀賞　日本放送協会
▽小田島雄志賞　世田谷パブリックシアター（「メアリー・スチュアート」作品賞）

編集後記

▲コロナ禍により世界中に感染が拡がり、文明史的な規模で人類が危機にさらされています。日常の中に否応なく非日常が入り込んできています。多くの苦難に負けずにアートが私たちの明日をつくりだしてくれることを祈りたいと思います。（曽田）

▲昨年は中国の2都市で行われる国際演劇祭にITIから2団体を派遣する準備を進めていたが、おじゃんになった。公演団は国境で足止めを食らうが、戯曲なら世界中フリーパスだ。各国で上演見合わせになっている戯曲を探し出して日本語訳し、「コロナ禍の世界演劇エキジビション（展演）2021」、できないものか？（菱沼）

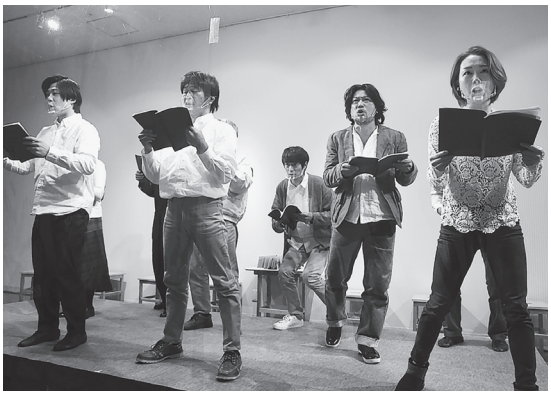
（© 国際演劇協会日本センター 2021）

I.T.I. 第132号
2021年1月31日発行
発　行　公益社団法人国際演劇協会日本センター
発行人　永井多恵子
編集人　曽田修司　吉岩正晴　菱沼彬晁
住　所　〒151-0051　東京都渋谷区千駄ヶ谷4-18-1国立能楽堂内
Tel03-3478-2189　Fax03-3478-7218
Email:mail@iti-j.org
URL http://iti-japan.or.jp

「紛争から生まれた演劇 12」　コロナ疫下、苦難の上演

2020 年、シリーズ 12 年目を迎えた「紛争地域から生まれた演劇」は、コロナ禍の中、イスラエルの現代演劇『イサク殺し』が上演された。本国イスラエルでは上演が困難とされ、厳しい制約、制限下で行われた日本公演の稽古場の苦心から本番まで、イスラエル演劇の研究者でこの作品の翻訳者・村井華代さん（共立女子大学教授）に語ってもらった。

衝撃のイスラエル現代劇『イサク殺し』



シリーズ最多、キャストが 12 人の『イサク殺し』
東京芸術劇場アトリエウエストで（撮影・石澤知絵子）

村井華代
共立女子大学教授
イスラエル演劇研究
『イサク殺し』翻訳

２０２０年12月10日、東京の新型コロナウイルス新規感染者が600名を超えた。翌11日、《紛争地域から生まれた演劇12》としてイスラエルの現代戯曲『イサク殺し』リーディングが幕を開けた（～13日、演出・小林七緒〔流山児事務所〕、於・東京芸術劇場アトリエウエスト）。筆者は戯曲翻訳者・イスラエル文化アドバイザーとして連日稽古に参加していた。

『イサク殺し』（１９９９）は、１９９５年に起こったイツハク・ラビン首相暗殺事件の次第を、ＰＴＳＤ（心的外傷後ストレス障害）の患者が劇中劇として演じるという仕立ての劇である。作者はイスラエルで最も著名な劇作家の一人モティ・レルネル（71）。物語は実話に基づくフィクションだが、イスラエル・パレスチナ問題を語る上で避けて通れない宗教と国家の関係、そして《恐怖が紛争を終わらせない》悲劇的状況が描かれている。

それでいてコミカルな要素も歌も多い、文句なく「面白い」芝居である。

本作を《紛争12》で扱うことは前年の《紛争11》で予告済みだったが、何の因果か疫禍の下の上演となった。観客は1回30人限定。芸劇地下の細長いスペースに《紛争》シリーズ最多であろうキャストが12人。本番に先立ち筆者を含めスタッフ・キャスト全員がＰＣＲ検査で陰性を確認し、本番ではキャスト全員マウスシールドを着用、演技スペース全体をビニール幕で覆った。《紛争》シリーズは今や完売必至の人気企画だが、今回ばかりは無事に上演ができたことが何よりと言わねばならない。

難局を乗り切った林英樹氏はじめＩＴＩ日本センター諸氏、絶妙なオリジナル曲を作ってくれた諏訪創氏、全体を音楽劇の立ち稽古のレベルにまで膨らませた演出の小林氏、逆境を跳ね返してくれた俳優諸氏には感謝の言葉しかない。

本当は個々の台詞について意見を交換したかったが、稽古は1日4時間、9日間で計36時間。感染防止のため稽古前後の会食は不可。素晴らしいキャストを前にしながら、コミュニケーションと作品理解に割くべき時間が圧倒的に足りない。公共の助成は本来こうした場にこそ投入されるべきで、それだけが残念だ。

12月18日から24日まで配信された有料アーカイブの購入数は98。会場との合計観客数は例年並みか。だが筆者にとっては、8年続けたイスラエル演劇研究にひとつの大きな実りがついた機会であり、配信を見た作者レルネル氏の熱い感想も含め、胸をなでおろす反応が得られた。２０２０年は演劇界全体にとって災禍の年だったが、どうやら終えることができたのである。